

長田夏樹氏の契丹文字に係る論文をよむ—その2

吉池孝一

1. はじめに

東アジアの解読を必要とした諸文字につき過去の研究を読み直し、解読の歴史のなかで、どのような位置を占めるかを確認してみたいとおもう。今回は『KOTONOHA』92にて長田夏樹氏の契丹文字・契丹語研究に係る論文「契丹文字解読の可能性 一村山七郎氏の論文を読みついで」(1951年12月)を読んだ。今回は同氏の「契丹語解読方法論序説」(1984年3月)を読む。長田1984は、その誤植を訂正し、表現を改め、さらには内容の増補や削除もおこなって論述集に長田2001aとして収められた。長田1984が旧版、長田2001aが新版ということになる。

さて、旧版と新版はともに、(1)契丹大小二文字の形状 (2)中陵墓室哀冊の筆写と考証 (3)東西二陵出土の哀冊碑石 (4)契丹哀冊の釈義と資料の集成 (5)契丹大字の発見と紹介 (6)解読方法の模索 (7)小字資料の出土と研究の進展 (8)錦西西弧山出土の蕭孝忠墓誌 (9)大字資料の出土とその研究 (10)許王墓誌の出土とその研究。附表I「許王墓誌試読」、附表II「契丹小字元字総表」からなる。

(1)から(8)は契丹文字研究の歴史を詳述したものである。旧版と新版の間に主旨の変更はなく、新版から読み取ることのできる価値は旧版がすでに有する。ところが、(9)以降は趣を異にする。(9)は契丹大字の干支についての解読案を、(10)と附表Iは契丹小字「許王墓誌」の音価を提示したものであるが、旧版から新版への内容の変更は小さくなく、それぞれ独立した論文としての価値を持つといえよう。したがってこれより、(1)から(8)、(9)、(10)と附表Iの三つに分けて内容を確認する。

2. 契丹文字研究史

長田1984の(1)から(8)は契丹文字の研究史となっている。とくに日本側の研究の紹介が詳しく、契丹小字の解読史にとって重要な指摘がなされた。すなわち、契丹文字研究小組1977は、契丹小字で表記された借用漢語の漢語音に着目しその漢語音から小字の音価を推定するという「手続き」によって解読を大きく進め清格爾泰・劉鳳翥等1985に結実し広く世に問われることとなったわけであるが、この「手続き」自体が何時発見されたかという問題は別に存在する。この点について、長田1984は山路1943とシャフクノフ1963(筆者未見)を紹介しこれらを解読史の中に位置づけた。

山路1943は宣懿皇后哀冊文の「文」に相当する二字の組合せ文字の左をwē、右をènとし両者相合してwē-ènがwènとなって「文」をあらわすこと、また仁懿皇后哀冊の「仁」に相当する二字の組合せ文字の左をji、右をinとし両者相合してji-inがjinとなって「仁」をあらわすことに言及し、「契丹語の中には斯様な構造を有して漢語・漢字音を表はすものが可成り多い。」(321頁)とする。この論文について長田1984は「契丹小字解読の出発点とすることのできる着想であると言えよう。」(新版655頁)と高く評価する。次いでシャフクノフ1963を紹介する。長田1984によると、当該論文は景宗・聖宗・興宗・道宗・仁懿・宣懿を表記する組合せ文字を漢字音で読み、さらに碑文「郎君行記」中の大金・皇帝・経

略・梁山の梁を表す組合せ文字を、女真文字としてではあるが、漢字音で読んでいるという。これに対して長田 1984 は「60 年代という時代を考えると、少なくともこれだけの契丹文字を漢字音として読んでいることは正鵠を射たものということができよう。」(新版 663 頁)と高く評価する。清格爾泰・劉鳳翥等 1985 は、山路 1943・シャフクノフ 1963 に対して一定の評価を与えるが、解読の「手続き」の発見およびその利用という観点から評価をしているわけではないようである¹。

以上を要するに、契丹小字解読の鍵すなわち借用漢語音の利用という方法は、山路 1943 において発見されており、その後も漢字音を利用した音価の推定はなされた。契丹文字研究小組 1977 で提示され清格爾泰・劉鳳翥等 1985 として結実した契丹小字解読は、漢字音を利用して音価の推定をするという方法を組織的に利用したものということができよう。契丹文字研究小組 1977 が直接に山路 1943 の着想の影響を受けたか否かは不明であるが、山路 1943 を解読史の中に位置づけるならばその価値は相当に高いといえよう。そのことを長田 1984 は明示したのである。

3. 契丹大字「干支」解読案

長田 1984 の(9)「大字資料の出土とその研究」は、契丹大字碑文の「蕭孝忠墓誌」と「北大王墓誌」の中に見られる紀年につき、閻万章 1957、豊田 1963、劉鳳翥 1982 の解読案を併記しつつ自らの解読案を提示したものである。これを、長田 2001a に収める際に重要な改定が行われている。それは長田 1984 から長田 2001a への自説の発展とみられるから、両者は二つの異なる論文ということができよう。もっとも、その説の展開を理解するためには、長田 2001a の該当個所の誤植につき訂正をしなければならない。結論から言えば、十二支に相当する十二獣の表(長田 2001a の 675 頁)の蛇に対応する契丹大字を{B}{C}(以下契丹文字を{}を付したラテン文字で代用する)として二つを挙げるのであるが、左の{B}を誤植として削除すべきである。この点および他の訂正個所については注を参照されたい²。

¹清格爾泰・劉鳳翥等 1985 は山路 1943 につき「本文主要討論契丹大、小字問題，沒有進行解讀，只舉出了一些解讀實例，就在這些解讀實例中也表露出作者探求契丹字音讀的情況，這是值得重視的。」(664 頁)とし、シャフクノフ 1963 にたいしては「這篇文章從整個來說介紹性質的，但在文末附了作者對三十幾個契丹字解讀的成果，其中，他所推定的音值有不少是正確的，可惜文中沒有詳談其推論過程，故不明所拋。另外，作者將契丹、女真字混為一談，這也需提醒讀者注意。」(670 頁)とする。

² 以下やや込めた議論となるが、先ず長田 1984 から長田 2001a への改定を確認し、しかる後に訂正個所と訂正すべき理由を述べる。なお、{ABC}と{DE}で契丹大字の代用とする。

①「蕭孝忠墓誌」(忠 11)の契丹大字「・・・廿五{A}{B}日」(長田 2001a の 674 頁 6 行)につき、長田 1984 の漢訳は「・・・廿五水蛇日」とするが、長田 2001a は「・・・廿五水猿日」とする。長田 2001a は契丹大字{B}を蛇から猿に変更する。

②十二獣の表(長田 2001a の 675 頁)の蛇に対応する契丹大字を、長田 1984 は{B(C)}とするが、長田 2001 は{BC}とする。なお()は「北大王墓誌」で用いられる同義異字をさす。これのみでは長田 2001a で()を取り除いた理由は不明。

③十二獣の表(長田 2001a の 675 頁)の猿に対応する契丹大字と女真文字を、長田 1984 は空欄とするが、長田 2001a は契丹大字を{B}とし女真文字も新たに充当する。

④十二獣の表(長田 2001a の 675 頁)の鶏に対応する契丹大字を、長田 1984 は{D}とするが、長田 2001a は{E}とする。

ここに挙げた①②③は互いに関連する事項である。②をみると長田 2001a は{B}と{C}を蛇とし、③をみると長田 2001a は{B}を猿とする。このままでは{B}が蛇と猿の両者に対応することになり不都合である。①をみると長田 2001a は{B}を蛇から猿に変更しており、これによるならば、②において長田 2001a

干支を表す契丹大字につき、長田 2001a と清格爾泰 1997 を比べるとだいぶ異なる部分がある。個別の契丹大字の解読について何ゆえに両者の異なりが生じたかということについて検討することは興味深いことであるが、それは他日を期すとして、今回は個別の解読の前提となるもの、すなわち干支をどの様に考えるかということにつき各説を比較する。

さて、紀年は年月日と数字と干支を表す契丹大字で表記される。その内干支について長田 1984 に引用されたものをみると、閻万章 1957 と長田 1984 は十干を五行(木火土金水)とし、十二支を十二獸(鼠牛虎兔竜蛇馬羊猴鷄狗猪)とする。豊田 1963 は五金(錫銅金銀鉄)十二獸、劉鳳翥 1982 は五色(青赤黄白黒)十二獸とする。問題は十干のようである。この十干については、哀冊碑文の漢文と契丹小字との対照により甲乙、丙丁、戊己、庚辛、壬癸が五種の契丹文字に対応していることは知られていたのであるが³、この五種をどのようなものとするか解釈の分かれるところである。いま各説と契丹文字を並べ示すと次のようになる。なお、契丹小字はラテン文字の小文字で、契丹大字はラテン文字の大文字(先に使用したラテン文字とは異なる)で代用する。提示した契丹小字は劉鳳翥 2001 による。長田 1984 と長田 2001a はこの個所については同様となっている。

十干	甲乙	丙丁	戊己	庚辛	壬癸
五行	木	火	土	金	水
五色	青	赤	黄	白	黒
金属	鍔(山路)	銅	金	銀	鉄
	錫(豊田)				

契丹小字	abc	ebc	g	h	ij
	abd	ebd			ik
契丹大字(清格爾泰 1997a)	A	B	C	D	E
契丹大字(長田 1984)	A	B	C	F	D

五行説は、早くは厲鼎{火奎} 1954 にある。その論拠は遼代に五行家の学が盛行していたという状況による⁴。閻万章 1957 はその説を受け継いだものである。その後、閻万章 1990 は五色説に対する論駁を試みるとともに、新たな論拠を提出する。すなわち、唐代において契丹は、五行十二獸を使用するウイグル汗国に百年近く統治されたわけであるが、この時期に同様の紀年法を採用するようになったというものである⁵。これもやはり情況証拠と

は蛇を{BC}とするのであるが、これは削除すべき{B}がそのまま残ってしまったと考えることができる。このように考えて、十二獸の表(長田 2001a の 675 頁)の蛇に対応する契丹大字を長田 2001a は{BC}とするが、一方の{B}を誤植として削除すると長田 2001a での改定が有意義なものとなるとおもうのであるが如何であろうか。

なお、長田 2001a の 675 頁十干表の庚辛に相当する各種文字のうち、女真文字の五行に配した文字は『鉄』を表す文字であるから誤記もしくは誤植である。さらに、同頁十二支の表の巳に相当する女真文字は華夷訳語のものとなっており、寡聞にして出所が分からない。

³ 厲鼎{火奎} 1954 の 207-208 頁参照。

⁴ 「甲乙同用，可能是取五行家甲乙“木”的意思；庚辛同用，是取五行家庚辛“金”的意思。諸家補遼史藝文志，都有王白的百中歌和耶律純的星命總括二書，這都是五行家著作，可見遼代此學的盛行。」(208 頁)

⁵ 「拋岑仲勉《吐魯番木柱刻文略釋》說，首行一題“土猴年”，另一題“火羊年”，即戊申年和丁未年。這是古回鶻文用五行代替十干的明顯証拠。我們知道，契丹人在唐代曾受回鶻汗国統治將近一百年，所以在紀年

ということになる。長田 1984 は「女真語の五行・五色と対比させると、・・・と五色ではなく五行が、それぞれ字形を継承していることが明らかで、筆者が五行説をとる由縁である。」(新版 675 頁)として五行説をとった。たしかに、契丹大字の{B}は女真文字に似ているがこれのみでは字形の継承を証するものとはまでは言えないであろう。

五色説は、辛兌鉉 1937 が早いということであるが未見である。劉鳳翥 1982 は次のようにいう。史書に拠ると金と黄をともに契丹語で「女古」と称した。碑文において、漢語の金を契丹小字{g}及び、点を付した{g点}の二種で表記する。この{g}は十干の戊己に対応するから、戊己は五行ではありえず、五色もしくは五種の金属である。満州族や蒙古族は五色を採用していることからみて、契丹族も五色を採用していたにちがいない(以上、趣意。劉鳳翥 1982 は満州族や蒙古族に言及しないが、参照したという山路 1956 にはこのことは書かれている)⁶。もしも五行であるならば、庚辛に対応する契丹小字か{h}ではなく{g}もしくは{g点}でなければならないから、劉鳳翥 1982 の論点は明快である。この点につき、即實 1996 の説も興味深い。戊己に対応する契丹小字{g}が、碑文において漢語の金に対応する例は一つある。また、{g点}が碑文において漢語の金に対応する例は一つある。点のない{g}が戊己に対応する例は多数ある。すなわち、{g}=戊己(多数)・金(1例)、{g点}=金(1例)となる。{g}=金(1例)は{g点}誤記とすると、{g}=戊己(多数)、{g点}=金(2例)となる。契丹国誌と遼史の記述に拠ると、黄の契丹語は「(鳥+衣)羅個」または「女古」、金の契丹語「女古」である。子音の音形よりみて「(鳥+衣)羅個」と「女古」は同源の語であり、それを{g}と{g点}で表記した。すなわち、{g}=黄、{g点}=金である(以上、趣意)⁷。

五つの金属に当てる説は、早くは山路 1956 があり、鍍銅金銀鉄とする。契丹小字に、山路氏自身の解讀音価をあてはめて金属の漢字音として読む。甲乙に相当する契丹小字をsingと読み「鍍」の漢字音とし、丙丁に相当する契丹小字をdungと読み「銅」の漢字音とし、戊己に相当する一字の契丹小字をjinと読み「金」の漢字音とする。残る庚辛に相当する一字の契丹文字を契丹語としてmunggu(銀)と読み、壬癸は契丹語としてsali-ga(鉄)と読む。もっとも、山路氏がsingと読んだものに現在判明している音価を当てはめると

方面、無疑是採用古回鶻文的紀年方法。因此，我認為契丹人紀年用五色代替十干是不可能的。」(88頁)。もっとも、ウイグル文書で五行十二獸の紀年法が用いられていることについては、豊田 1963 が 22 頁で述べている。

6 「拋《契丹国誌》卷首，契丹人管潢水叫“女古没里”，“女古”為“潢”之義。拋標点本《資治通鑑》第 2990 頁，“潢水”即“黃水”，所以契丹語中“黃”音“女古”。又拋標点本《遼史》第 367 頁，契丹語中“金曰‘女古’”。可見契丹語中“金”與“黃”是同音詞。翻譯“戊”、“己”的契丹小字 6 号【{g}吉池補】和加点的 7 号【{g点}吉池補】都音“女古”，都可根拠不同情況釋為“金”或“黃。”(50頁)。

7 これ以外に、即實 1996 の述べるところを二つほど紹介しておく。いずれも漢字音訳契丹語の信憑性が問題となる。丙丁に対応する契丹小字{ebd}は清格爾泰・劉鳳翥等 1985 の音価によると l-iau-ai となる。『說郛・重編燕北錄』の記述に拠って契丹語『赤』の音訳漢字を「掠胡」とし得る。そうすると l-iau-ai と「掠胡」の音は基本的に一致する。もっとも、ai とした契丹小字{d}が k'ai であったとすると更に良く合うことになるという。これより即實氏は{d}を k'ai と推定する。なお、この契丹小字{d}を劉鳳翥 2001 は ai ではなく ku としており、即實氏にとっては都合の良い音価に変更されている。この音価が即實氏の説から来たものかどうか、その関係の有無については確認してない。壬癸に対応する契丹小字{ij}と{ik}は清格爾泰・劉鳳翥等 1985 の音価によると ?-u、?-iu となる。『夢溪筆談』の記述に拠って契丹語『黒』の音訳漢字を「姚」とし得る。「姚」を ?-u、?-iu で表記したとするならば、清格爾泰・劉鳳翥等 1985 で不明であった契丹小字の{i}の音価を [jə] とすることができる。{i}の字形をみると漢字の「由」に酷似しておりこの説の支えとなるという。なお、即實 1996 は触れないが、{i}が契丹語で『黒、鉄』を意味し漢字「由」から作られたということについては山路廣明 1956 の 35 頁にある。

s-iau となり、dung は l-iau となる。これによるならば「鑄」「銅」の漢字音とは合わない。その後山路廣明 1956 を受け、豊田 1963 は錫銅金銀鉄とした。戊己を表す契丹小字 {g} が漢語訳の「金」に当たることが、大金皇帝郎君行記の契丹文字と漢語の対応資料より分かることを注記する。これは金属説にとって有利である。もっとも、さきに述べた劉鳳翥 1982 や即實 1996 の説によるならば、五色の黄を表記しているともとれる。

契丹語の天干についての概略は以上のようなものである。劉鳳翥 2001 は、五行説・五色説など諸説入り乱れて定まらないため暫くは論争を避けて甲乙などの天干によるとする。

4. 「許王墓誌」の墓主および契丹小字の音価

長田 1984 の(10)と附表 I は、1970 年に発見された契丹小字碑文「許王墓誌」についての論考である。

一般論として、墓誌の解説にあたって、まず墓主は誰であるかということが問題となる。墓誌は墓主の経歴を記すわけであるから、墓主を特定し史書などによりその経歴を明らかにすることができたならば、解説の大きな助けとなる。阜新市文化局文物組 1979 は、「許王墓誌」につき、その墓主を耶律義先とする。劉鳳翥・于宝麟 1977 には墓主について特段の言及はない。一方長田 1984 は、墓誌に僅かに残された漢文面の役職名などにより、墓主を耶律幹特刺と推定し『遼史』に拠りその経歴を詳しく紹介する。この長田氏の説は、王弘力 1986 で紹介され定説となり現在にいたっている。

さて、この節には附表 I 「許王墓誌試読」がある。これは劉鳳翥・于宝麟 1977 によって為された契丹小字の漢語による考釈に対して、長田氏の私案になる音価を付したものである。借用漢語音と契丹語の部分があり、この両者を表記した契丹小字の音価につき、契丹文字研究小組と長田 1984 との間でどの様な違いがあるか、興味深いところである。また、長田 1984 の附表 I 「許王墓誌試読」は長田 2001a に収められる際に重要な改定が行われている。それは長田 1984 から長田 2001a への自説の発展とみられるから、両者は二つの異なる論文ということができよう。長田 1984 および長田 2001a では、音価につき詳しい説明はなされていないが⁸、それぞれの時期における契丹小字および契丹語に関する長田氏の考えが推定音価として結実したものとみることが出来るわけであり、両者を比較することにより、その考えをある程度汲み取ることはできる。

なお劉鳳翥・于宝麟 1977 の考釈には音価は付されていない。そこで長田 1984 が見ることのできた最新の成果である清格爾泰・劉鳳翥等 1978 に掲げられた音価表の 132 字を機械的に許王墓誌に当てはめたものと長田 1984 と長田 2001a の音価につき、幾つか比較してみる。契丹小字で表記された借用漢語を漢字で提示し、それに対応する契丹小字の音価を並べたものである。契丹小字は省略する。なお、長田 1984, 2001a の原文で子音に後続する母音の上下に付された_hは印刷の都合によりここでは_hで記す。子音 h に付された下線_hは_hで記す。なお附表 I の誤植については注を参照ねがいたい⁹。

第 1 行「開府儀同三司」

⁸ ラテン文字の音価についての解説は長田 2001b 「第 33 章 契丹漢字音探源」にある。

⁹ 683 頁 22 行「蘭陵群」の「蘭」に付された le-ha-an→le-ha-an。684 頁 8 行「同中書門下」の「門」に付された mu-ni→mu-ni。685 頁 6 行「功臣之字六」の「臣」に付された cy-jin→cy-jin。同頁 18 行「長寧宮之副部署」の「寧」に付された ne-jing→ny-jing。

清格爾泰・劉鳳翥等 1978 : k'-ai pu ŋ-i t'-uŋ s-a-am sī
 長田 1984 : ka-ai fu nge-i te-ung se-ha-am sī
 長田 2001a : xa-aj pju ngy-i tu-ung se-ha-am sī

第 11 行「静江軍節度使」

清格爾泰・劉鳳翥等 1978 : ts-iŋ k-aŋ k-iun ts-e tu ſī
 長田 1984 : ze-ing gi-ang gi-iun ze-iê du ſī
 長田 2001a : çe-jing gy-ang gy-jun çe-jê du ſī

第 12 行「金吾衛上將軍」

清格爾泰・劉鳳翥等 1978 : k-m ŋ-u ui f-aŋ s-iaŋ k-iun
 長田 1984 : gi-me nge-u uei ſi-ang se-iang gi-iun
 長田 2001a : gy-mu ngy-u wi ſi-ang se-jang gy-jun

論すべき点は多々あるが、ここでは子音の単音表記と母音つきの音節表記について確認しておく。いま、清格爾泰・劉鳳翥等 1978 で、k' t' s など、子音のみとして音価がふされた契丹小字と長田 1984, 2001a を並べ示すとつぎのようになる。なお、長田 1984, 2001a で下線が付された母音は後続母音に同化して発音されないことを示す。

・ 清格爾泰・劉鳳翥等 1978 : k' ŋ t' s
 長田 1984 : ka nge te se
 長田 2001a : xa ngy tu se
 ・ 清格爾泰・劉鳳翥等 1978 : ts k k ts
 長田 1984 : ze gi gi ze
 長田 2001a : çe gy gy çe
 ・ 清格爾泰・劉鳳翥等 1978 : k m ŋ f s k
 長田 1984 : gi me nge ſi se gi
 長田 2001a : gy mu ngy ſi se gy

子音のみの単音文字を認めるかどうか、認めないとしたらどの様な母音を伴った音節文字とするかということであるが、借用漢語と原字との対応によるかぎり、子音原字の想定は合理的なものである。たとえば漢字「密」には原字{ab}が、「馬」には原字{ac}が、「金」には原字{da}が対応するわけであるが、このような場合、原字{a}に m を想定することに無理はない。借用漢語の場合にはこのような子音原字の想定に無理はほとんどないが¹⁰、それを契丹語にあてはめた場合、子音が連続し、母音が表記されない語が多数に上ってしまう。この点を解決するために契丹文字研究小組 1977 は子音原字の全てに母音[a]を付加し後続する母音がある場合、後続母音に同化して母音[a]は発音されないとした¹¹。この考えは清格爾泰・劉鳳翥等 1978, 1985 にも受け継がれる。いま契丹文字研究小組 1977 より一例を挙げると次のようである。すなわち、契丹語『馬』に対応する原字に{ae}がある。これを蒙古文語 mori と比較して原字{a}を m+母音、{e}を ri とする。原字{a}は借用漢語との対応に

¹⁰ 借用漢語でも漢字音「金」の表記には問題がある。「金」は{da}で表記するのであるが、{d}と{a}に他の借用漢語より導き出した音を当てはめると gm となり、母音が表記されないことになってしまう。

¹¹ 「表示輔音的契丹原字，不一定是嚴格意義上的純粹的輔音字母。它一般帶有一個央元音 ə。而在原字同原字相拼，發生語音結合時，這個央元音 ə 便往往作為一個介音，被融入另一個起主導作用的元音之中。」(300 頁)

より子音 m としたわけであるが、契丹語をみると m+母音と考えられ、この母音を[a]と想定する。同様の子音原字が幾つかあることより、総ての子音原字に[a]を想定したというわけである。そして借用漢語においては後続母音に同化すると考えたわけである。したがって借用漢語において、たとえば「洛」は l(ə)-au-u → lau ということであるが、(ə)は省略して記すので、清格爾泰・劉鳳翥等 1978 では上掲の表のようになるのである。

これに対して、長田 1984 はそれぞれの子音に固定した母音の付加を認める。上掲表をみると、a, e, i などの母音がみえる。e は清格爾泰・劉鳳翥等 1978 の[a]に相当するものである。長田 2001a では a, e, i のほかに y, u などがみえ、この考えはより強く打ち出されている¹²。契丹文字研究小組 1977 は子音に固定した母音の付加を認めない方向にあるので、長田 1984, 2001a は契丹文字研究小組とは異なる方向に進むものといえよう。

その後、高路加 1988 に至ると、契丹文字研究小組 1977 を補充する考えが提出された。すなわち、子音原字が二つ以上列なり併せて語頭にある場合それぞれ母音[a]を帯び、母音を持つ原字と連用される場合子音原字はその母音と同類の母音を帯びるというものである¹³。清格爾泰 1997b はこの考えに母音調和を加味して幾つかの契丹語の読音を定めた。例えば契丹語の『第一』は m-sa-ai というように子音原字を含む 3 つの原字で表記されているわけであるが、これを masai と読むのである。同様に、『第二』ʃ-ru-wei → ʃuruwei、『第五』t'-w-o-i → t'owoi などとする。

しかしながら、契丹文字研究小組 1977 や清格爾泰 1997b のように個別の母音との連結を認めないという立場は、契丹小字で契丹語を表記する場合しばしば母音が表記されなかったと表明することと同義ではなからうか。そもそも、文字と発音の関係にはさまざまなレベルがある。音韻の一つ一つに文字が対応するような場合もあるが、それは稀なほうで、普通には両者の対応には大小さまざまなズレがある。その言語を熟知している者にとっては、文字は発音を暗示すれば事足りるとさえ言い得る。音韻の全てが文字に移し替えられなければならないという法はないのである。そうであるならば、契丹語では母音が記されず子音を頼りに語の認識をしたが、借用漢語音の表記にあっては母音の表記に腐心した、というようなことがあっても不思議ではない。中村 2008 によると、このような契丹小字の用法はウイグル文字に倣ったものであるという¹⁴。なお、呉英喆 2007 は、子音の前後に母音を付加して読む規則のある原字を紹介する。たとえば s, pu, ir などとされる契丹小字の原字は、契丹語において[sə]と[es]、[bu]と[ab]、[ir]と[ri]のように両用の読み方が為されるという。これなども、正書法上の規則というよりも、契丹語においては母音が表記されない傾向にあったことの反映ではなからうか。

¹² 長田 2001b によると、y は[u, u]で u は[u, u]。なお u の音価につき原文では唇歯接近音[v]であるが母音の[u]を意図したものであろう。

¹³ 「表示輔音的契丹原字，在兩個或數個連用并位于詞首時，一般各帶有一個央元音 ə；在同一字中有另一表示元音的原字時，這些表示輔音的原字也可帶有同類元音」（49 頁）

¹⁴ 「ウイグル文字は原則として単音文字であるが、母音に関しては表記原則が一定していない。ある場合には表記され、ある場合にはされない。しかし漢字音表記に関しては原則として母音を必ず表記している。固有のウイグル語では母音が十分に表記されず、漢字音では念入りに表記するという方法は、契丹小字においても受け継がれている。つまり、固有の契丹語表記では母音は必ずしも全て表記されないが、漢字音に関しては原則として表記している。このような表記法も、ウイグル文字に倣ったと言いうるであろう。」（3 頁）

5. おわりに

契丹語の十干が五行であったか五色であったかそれとも五つの金属によるものか、すくなくとも劉鳳翥 2001 の段階においては定まった説はなかったようであるが、私見によれば五色説が有力であるようにみえる。その後の展開については寡聞にして知らない。

契丹小字の子音文字の扱いについても未だ定まった説はないようである。今後、契丹語部分の解読の進展とともに解決されるのであろう。いずれにしても、個別の母音との連結を認めるか或いは認めないかという二つの方向があり、長田 1984, 2001a は前者を代表したものとしよう。

参考文献(発行年順)

- 山路廣明 1943. 「契丹大字考」, 『浮田和民博士記念 史學論文集』(早稲田大学史学会編纂)東京:六甲書房、313-322 頁。
- 厲鼎(火奎)1954. 「義縣出土契丹文墓誌銘考釋」, 『考古學報』第 8 冊, 203-211 頁。
- 山路廣明 1956. 『契丹製字の研究』東京:アジヤ・アフリカ言語研究室。
- 閻万章 1957. 「錦西孤山出土契丹文墓誌研究」, 『考古學報』1957 年 2 期, 69-84 頁。
- 豊田五郎 1963. 「契丹隸字考」, 『東洋學報』第 46 卷 1 号, 1-39 頁。
- 劉鳳翥・于宝麟 1977. 「契丹小字《許王墓志》考釋」, 『文物資料叢刊』第 1 輯, 88-104 頁。
- 契丹文字研究小組 1977. 「關於契丹小字研究」, 『內蒙古大學學報』1977 年第 4 期契丹小字研究專号。『契丹小字研究論文選編』(陳乃雄・包聯群編、內蒙古人民出版社)への再録(149-309 頁)による。
- 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1978. 「契丹小字解讀新探」, 『考古學報』1978 年第 3 期, 353-387 頁。
- 阜新市文化局文物組 1979. 「遼寧阜新縣遼王墓清理簡報」, 『文物資料叢刊』第 1 輯, 84-87 頁。
- 劉鳳翥 1982. 「契丹大字中的紀年考釋」, 『民族語文』1982 年第 3 期, 49-53 頁。
- 長田夏樹 1984. 「契丹語解讀方法論序說」, 『內陸アジア言語の研究 I』神戸市外国語大学, 1-49 頁。
- 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985. 『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社。
- 王弘力 1986. 「契丹小字墓誌研究」, 『民族語文』1986 年第 4 期, 56-70 頁。
- 高路加 1988. 「契丹小字複數符号探索」, 『內蒙古大學學報(哲学社会科学版)』1988 年第 2 期, 44-51 頁。
- 閻万章 1990. 「關於契丹大字墓誌紀年的考釋問題」, 『遼海文物學刊』1990 年第 1 期, 82-98 頁。
- 即 實 1996. 「天干語義解」, 『謎林問徑—契丹小字解讀新程』瀋陽市:遼寧民族出版社, 285-304 頁。
- 清格爾泰 1997a. 「關於契丹文字的特點」, 『アジア諸民族の文字』ソウル:太学社, 101-117 頁。
- 清格爾泰 1997b. 「契丹語數詞及契丹小字拼讀法」, 『阿爾泰學報』(韓国)第 7 号。『契丹小字研究論文選編』(陳乃雄・包聯群編、內蒙古人民出版社)への再録(710-724 頁)による。
- 劉鳳翥 2001. 「最近 20 年來的契丹文字研究概況」, 『燕京學報』新 11 期, 205-246 頁。
- 長田夏樹 2001a. 「第 29 章 契丹語解讀方法論序說」, 『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』京都市:ナカニシヤ出版, 634-687 頁。
- 長田夏樹 2001b. 「第 33 章 契丹漢字音探源—契丹小字によって表記された漢字音の音価とその体系について—」, 『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗

- 言語学試論・邪馬台国の言語一』京都市：ナカニシヤ出版, 724-737 頁。
- 吳英喆 2007. 「契丹小字中の“元音附加法”」, 『民族語文』2007 年第 4 期, 40-51 頁。
- 中村雅之 2008. 「表音文字の配列」, 『KOTONOHA』第 72 号, 1-4 頁。
- 吉池孝一 2010. 「長田夏樹氏の契丹文字に係る論文をよむ—その 1」, 『KOTONOHA』第 92 号, 14-19 頁。